

半村良

光文社



講談 大久保長安

長編小説

半村良



講談
大久保長安 ③

長編小説

光文社

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―一三

(〒112-11)

光文社 文芸編集部

講談 大久保長安(上)

一九九五年 一月三〇日 初版第一刷発行

著者 半村 良

発行者 森元順司

発行所 株式会社光文社

東京都文京区音羽二―二―一三
電話 東京(〇三)三九四二―二二四一
振替 〇〇一六〇一三一―一五三四七 (代)

印刷所 堀内印刷

製本所 榎本製本

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 © Ryō Hanamura 1995

ISBN4-334-92242-2 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

講談 大久保長安 上巻／目次



異相の男

7

武田滅亡

31

急変本能寺

56

甲斐無血占領

85

飛来三兄弟

104

新春戦国放談

129

長安隱密行

156

古代鍛冶王の秘宝

184

ご存じ関ヶ原合戦

213

金銀大増産

238

慶長忍者合戦 上

251

慶長忍者合戦 下

278

装 装
幀 画
熊 村
谷 上
博
人 豊

講談 大久保長安 上卷

異相の男

一

時は天正八年と申しますから、西暦の一五八〇年。あの本能寺の変の二年前のことでございます。

まあこのころのわが国は、現代から見れば面白いと言ったら面白いかぎりです、織田信長は三年前から安土城へ移って、外人宣教師に学校を建てる許可などを与えようとしているし、豊臣秀吉はまだ羽柴筑前守で播磨を平定する寸前。明智光秀は丹波の国を与えられてうれしがっていると言った具合。

幕末、土佐勤皇党胎動の遠因を作ったとされる長宗我部元親だって、徳川の天下になったら山内さんが土佐へ来てて自分の国がなくなっちゃうのも知らないで、信長に鷹や砂糖をプレゼントしてゴマをするのに懸命だ。

西ではキリシタン大名が登場してきて、有馬晴信などという殿様が洗礼を受けたりしております。

徳川家康は三河と遠江を領土として、東に北条、北に武田と、苦勞している最中だ。

もつとも武田信玄は元龜四年に亡くなっておりまして、今は勝頼の時代。もうすぐこの二代目さんは信長と家康に攻められて自刃することになりますが、どうもこのあたりの時代は世代の交代期と申しますか、歴史上名高い人のお葬式が次々に行われております。

天正に入ってからでも、武田信玄、朝倉義景、浅井長政、上杉謙信、里見義弘、あまこ 尼子勝久、山中幸盛。

おっと大事なのを一人書き忘れました。

織田信長でございますが、それは二年後の天正十年のこと。そうなりますと明智光秀から穴山梅雪など、そろそろ逝ってしまいきますのできりがありません。

これくらい昔のこととなりますと、物価だってこまかいことは全然わからない。せいぜい知ったかぶりをするために、資料なんぞを漁ってみても、豆腐が一丁いくらだったか見当もつきはしません。

もつとも豆腐屋がそこらにあったかどうかともわからないんだから仕方がないけれど、残念なことです。

まあもの書きだからって、そうなんでもわかっていいるはずはないんで、せいぜい見てきたような嘘をつき、なんてところでご勘弁をいただくより仕方がありませんが、ここに一つ面白い記録が残っております。

日本にキリスト教を運んで来たのがポルトガルとイスパニアの船だったということはよく知られておりますが、ではいったいポルトガル人がいつごろ日本人と遭遇し、いつごろ日本へやってくるようになったかということは、案外知られておりません。

ポルトガル人の記録によりますと、彼らはまずシャムのパタニというところで、レキオス人と

遭遇したそうです。

どうやらポルトガル人は、レキオス人が交易のために船に積んできた黄金を見て目の色を変えたようですが、このレキオス人については、以後ポルトガルの記録にたびたび登場してきます。

レキオス人は日本人とは次第に区別して見られるようになりますが、ポルトガル人にその区別を教えたのは、中国人だったとされております。

ポルトガルの帆船がたびたび中国の広東あたりへ来て通商を重ねますと、広東の彼方の海上にレキオスという国があるとわかり、彼らはその国を探しに航海をはじめます。

レキオス。ときにはレケオとも書かれますが、もうおわかりでしょう。それは琉球のことなのです。レキオスは東京をTOKYOと書くのとおなじ要領でしょう。

ポルトガル人を刺激する黄金が、琉球の船にも積まれていたんですね。それで連中が意気込んでやってきて、次第に日本列島へ接近したおわりのほうが、皆様よくご存じの種子島たねがしま、とこうなるらしいのです。種子島の前にレキオスあり。学生のころに戻れたら、歴史の先生にそう言うてやりたい。こんな面白いものを、よくもあれほどつまらなく教えてくれたもんだと、筆者わたしなどはいまだに腹をたてているくらいです。

しかし、ポルトガルの船だって、そう簡単に日本へたどり着けたわけではない。

だいたいの場所はわかってきたのだが、いざ行こうとするといつも天候が悪化して、なかなか行くことができない。安全な航海時期が発見できなかったんですな。

現在いまならその理由ははっきりしている。

ご退屈かも知れないが、現在リスボンのアジューダ図書館に収蔵されている日本教会史から一部を抜粋する。

……ヨーロッパ人にして最初の日本発見者はポルトガル人なり。(中略) アントニオ・ダ・モッタ、フランシスコ・ジェイモト、アントニオ・ペイショットの三名は、機会を得てジャンクに乗り、中国へ行かんとすれど、タイフンまたはタイフー即ち、大いなる風の意味なる大暴風雨に遭遇し、ジャンクはザネガシマなる一島に入港。そこに鉄砲の用法を教えたりしかば、間もなく日本全土に普及したりき。

どうも、この記録にある三人は、正規の帆船に乗っていたクルーだったらしい。それが突如ジャンクで出港したとあるのは、シパンガスをめざした脱走だったようだ。

シパンガスはジャポンエスとも言い、金銀財宝の夢を彼らに植えつけたのは、言わずと知れたマルコ・ポーロ。

つまり、ポルトガル船が日本を探しに来る手順は、インドを出て広東あたりへついて、それからということになりがちなのだが、悲しいことに台風シーズンがわかっていなかった。それで来るたび台風にぶつかって、命からがら逃げ帰っていたらしいのだ。

ところでポルトガルなどは、船舶の運航管理が完璧に近く、日本来航に関しても詳細な記録が残されている。船名、船長名、寄港地、寄港年月日、出港年月日等、国家の事業として世界に交易船を出していたせいだろう。

しかしそれでも台風シーズンの知識がなかったころは、よれよれになって難破同様に辿りついていたらしく、日本側も単に南蛮船が来たという程度の扱いで、さしたる記録もないままにおわっているが、だいたい天文十五年（西暦一五四六年）より少し前から接触がはじまっていたようだ。

実はこのお話は、このくだりに大いに関わりがある。これからはじまる物語を御愛読くださる

うなら、この南蛮船来航の件をご記憶くだされば有難い。

さてイントロはこれくらいにして、ぼつぼつ物語にとりかかるといたしましょう。

二

森は緑濃く空は青、風穏やかに水澄んで、鳥の囀りと風吹くたびにおこる葉ずれの音以外には、格別な物音もないのどかな山路である。

まったくの僻地。わずかにけもの道めいた細い道があるが、それがどこへつながるものか、曲がりくねって先の見当などつきはしない。

その道へ不意に小さな人影が二つわき出した。茶色い毛皮を背中にかけて、山袴というには粗末なもんぺをはき、それでも手甲や脛巾をつけている。腰には細目の綱をグルグル巻きにして、それには鉋のような刃物をぶらさげ、そのほかにも袋や筒などをくくりつけている。

手には無造作に兎をぶらさげていた。平地の者がみれば、獵師の子らかと思うことだろう。

それに近いと言えなくはないが、獵師と言えば間違いになる。まるで一人前の獵師のような格好をしているその子らは、ひどく寡黙なようだった。

互いに次の行動を知りぬいて、言葉を用いずとも意志が完全に通じているらしい。小道を行く前の子が僅かに肩をあげたりするだけで、うしろから行く子が意味を汲み取って、異存がなければ前の子の通りに動く。

今も二人はもう獲物はこれ以上要らないときめ、獵をやめたところだったらしい。ゆっくり谷へおりて行く。

と、二人の前に忽然と小屋らしいものが現れる。いや。それは小屋とも言えぬ簡単なものだ。木の枝を編んで四角く囲い、草や木の葉で編み目を埋める。周囲の自然に溶けこんで、近くを通っても見落としかねない低いものだ。そばに大きな岩があり、なかばその岩を覆うように作られていた。

「アカ。アイ。父を手伝え」

女の声だが姿は見えない。二人の子は獲物の兎を岩の下に置き、ひらりと谷へおりて行く。走りおりると言うよりは、飛びおりると言った姿の消しかただ。

二人の子供は近道をしたのかも知れない。道なき道とよく言うがそれはものの譬え。道がないのは道とは言えぬ。山登りなどするときは、ルートなどと言うではないか。もっとも街道をルートということもあるから一概には断じられなくなっているけれど、ここで言葉の変化を言うのはよそう。

ただこれは、ずっと昔のお話だ。

アカ、アイと呼ばれた子供たちは、垂直に近いような急斜面を、木から木を伝い、蔓を掴んで滑りおり、猿ましろのような身軽さで、アツという間にやや平坦な岩場へついた。

さして広くはないけれど、山腹に洞窟が口をあけており、そこから流れ出す水が岩場の隅に一度溜まってから、細い滝となって流れ落ちている。

そこにはアカやアイとそっくりな形の身ごしらえの大人たちが、十人ほどいるようだ。洞窟から何かを運び出す者、また入って行く者。一人一人の動きは忙しく立ち働くという感じとはほど遠いが、もう長いこと続けていて、手慣れた作業であることはたしかなようだ。

「たまった。移せ」

それが二人の親だろうか。もしそうだとしたら、親も親なら子も子だと言うほかはないほど寡黙だ。アカとアイはそれとわからぬほど微かに頷いて、いったん洞窟の奥へ姿を消すと、革で作った大きな袋を背負って出てきた。

洞窟から流れ出す水がたまった岩場の隅のほうへ行き、重そうな袋を背負っているにもかかわらず、うしろ向きになってうずくまるような姿勢になると、岩場の端からすると身を沈める。どうやらそこから下へ道がつけてあるらしい。

袋を背負った二人が岩場から姿を消したとき、ビー……と鳶の啼き声が出たようだ。

が、そのとたん男たちはさっと緊張を示し、岩場に置いてあるこまごまとしたものを洞窟へしまひ込み、自分たちも奥へ姿を消してしまふ。

あとは千古の静けさが残るだけ。

そこに人がいたことを忘れるほど長い時が流れたあと、洞窟の真上のほうから、樵きこりが木を打つような音がした。

するとすぐ男たちが安心した様子で姿を現す。

「西の頭かしらじゃ」

ようやく言葉らしいものを聞くことができた。

「久しぶりよのう」

意味はそうだ。しかし実際には、聞いても意味が通じぬほど訛っている。

いや、訛っているというのは正しくない。ここではそれが正しい言葉で、他国には他国の言葉がある。それぞれの地方に正しい言葉があるわけだ。標準的な発音がきまつているわけではないから、妙な言葉だ発音だと言っても、それは異なる地方の人間から見てのことに過ぎない。

しかしここで実際の発音に従って記して行くわけにはいかない。わけがわからなくなるから、現代の言葉を基準にして意訳するのでご承知おき願いたい。

男たちは岩場を離れ、山腹の急斜面を登って行く。アカやアイも身軽だったが、大人たちもつと敏捷だ。それにどうやら岩場と山頂の間の道は完全に偽装されていて、他所者の目には決して気づかれることがないようにされているようだ。

さいぜん子供たちが声をかけられた尾根の草葺き小屋の前へ男たちが集まってくる。そこには彼ら同様毛皮をつけた獵師ごしらの男が一人待っていた。

しかしその男の山袴はなめし革で、頭部にも革製の帽子をつけている。

額から後頭部へかけて幅一寸ほどの厚い革鉢巻があつて、その上部には頭髮保護のための薄いなめし革で出来た袋状の部分があり、さらに後頭部から首筋を保護する厚い麻布が垂れている。

まったく実用的な構造で、視界を妨げることもないし動作にも支障がない。藪の中へもぐりこんでも、頭髮を引っかけるとような心配がなく、里では山兜と呼んだりしているそうだ。

「やあ」

山兜をかぶった男は気さくな態度で男たちを見まわした。

「ようお越しくだされた」

一番年嵩らしい男がそう言って頭をさげる。ほかの男たちも少し遅れて会釈をした。双方とも親しげである。

「頭領たづねより下されものじゃ。鯨じゃぞ」

山兜の男がにこやかに言い、

「おお」